

2017年 司教年頭書簡

「主こそ、わが光」

～ユスト高山右近にならう聖性への道のり～

カトリック京都司教
パウロ大塚喜直

ユスト高山右近の列福式

神のしもべユスト高山右近（以下、右近）の列福式が、2017年2月7日、大阪市（大阪城ホール）で行われます。右近の列福の恵みをいただくわたしたちは、いま、右近において、この世の救いであり、光であるキリストに出会っているのです。右近賛歌のとおり「主こそ、わが光」と、右近とともに主を賛美します。わたしは、日本カトリック司教協議会・列聖推進委員会の委員長として列福運動に携わりながら右近について多くのことを学び、右近が日本の教会への神からの恵み、賜物であることを知りました。列福式をひかえ、日本の教会が右近列福の恵みをどのように生かしていくべきかを、一緒に考えましょう。

1. すべての人に対する聖性への招き

カトリック教会は信仰のあかしにおいて模範を示した人びとを聖人と宣言し、特別な崇敬を払ってきました。どの聖人にも、その時代と場所で示された独自の信仰のあかしと普遍的メッセージがあります。列聖の意味とは、聖人のあかしとメッセージを、いまを生きるわたしたちが模範とし、また後世の人々に伝えることにあります。列聖や列福を過去の偉人を賞賛するための報奨や叙勲のように理解されることがありますが、第二バチカン公会議は、殉教者などの聖人への崇敬について、より霊的・司牧的な理解を示しました。教会憲章は、すべてのキリスト者に求められる聖性への召命について述べる中で（教会憲章 39～42）、教会における聖性とは、信者の「それぞれの生き方をもって愛の完成を追求し、他の人々を育て上げる一人ひとりにおいて、さまざまな形をとって現われる」（同 39）ものであり、聖性に達する手段は、「神のために隣人を大切に愛する」と教え、そのひとつのかたちである殉教は「優れた賜物、愛の最大の証明」（同 42）であると説明します。

聖人とは、感嘆すべき超人でも、英雄でもありません。もし、そのように考えると、わたしたちは聖人を身近に感じることなく、遠ざけていることとなります。そうではなく、神の賜物をうけて、愛の実践による聖性を身につけた人が、聖人とされるのです。聖人とは、例外的なキリスト者ではなく、普通のキリスト者のことです。聖人とは、端的にキリスト者のことです。しかし、普通のキリスト者であることが、ある時代と場所においては、きわめて非凡な生き方と映るのです。というのは、キリスト者はこの世的な生き方に対抗して、イエスが教えた山上の垂訓（マタイ 5章）の幸いを受け入れ、それを真剣に生きようとするからです。わたしたちは、聖人たちが示す模範を自分の生活でそのまま模倣するのではなく、どのような時代と背景の中でその人が聖性への道しるべとなったのかを知り、そのあかしを普遍的な模範とするのです。いまわたしたちは、右近という一人の道しるべの前に立っているのです。

2. 右近とキリストの十字架

右近は、そのきわめて特徴的な生き方によって、証聖者ではなく殉教者として列福されます。右近は処刑での殉教ではなく、長期間にわたる迫害と追放のなかで継続した殉教を生きただからです。右近

が生きた16世紀から17世紀初頭は、安土桃山時代から江戸時代にかけて長く続いた戦乱がようやく収束して、国が統一に向かう時代でした。知恵と才覚のあるものは誰でも、目に見える出世と権力、名誉と繁栄が手に入るという夢をもてたのでした。右近はそのような時代に武家に生まれ、上を目指す戦国武将たちの世界で育ちました。しかし、父、飛騨守がキリスト教に入信することから、高山家の運命は時代の流れとは全く異なる次元へ向き始めました。十歳のころ、家族ともども受洗した右近は、戦国武将として成長していきましたが、二十歳のころ、和田惟長事件（1573年）を契機に信仰に目覚め、十字架のキリストに惹かれていきます。

フランシスコ・ザビエルや当時の宣教師たちは、戦国時代の人々に、キリストの十字架をキリスト教の本質とし、キリストの受難の中に、人間に向けられた神のあわれみに満ちた愛を認識させようとしてきました。そして、キリストの十字架を仰いで、神と他者のために犠牲をささげることが名誉なことであると教えました。迫害に遭って処刑されるキリシタンたちの多くは、キリストと同じように十字架刑を望みました。右近も、キリスト教の教えによって死に対する恐怖を克服し、そればかりか迫害による苦しみと殉教さえも、信仰によって受けとめることができたのです。右近は、生まれつき意志堅固な有徳の士であったのでも、敬虔な信仰者であったのでもなく、武将として生きるがゆえの幾多の困難と葛藤の中で、悩みに悩みながら、神に信頼することを学んでいったのでした。

3. 右近の苦悩と信仰の試練

右近の苦悩の出発は、その死生観にあったと言えます。戦国時代では、死はまさに日常の出来事でした。殺さなければ殺される。殺すことは非道なことであることは分かっているけれども、家族や味方を守るためには心を鬼にしなければならないこともある。武士として生まれてきたからには戦さを避けることはできない。そのような時代に生まれた右近は、幼いころから繊細で、争いを好まず、死を恐れたといわれます。いつ自分が殺されるかと思うと夜も眠れず、人に無残に殺されるくらいならいっそ自ら命を断とうと考えたことさえあったようです。しかし、キリシタンにそれは許されません。右近にも生きることへの執着がなかったわけではなく、死ぬことへの恐怖もあったはずですが、誰にもいえない悩みを抱いて、憂鬱な毎日を送っていた少年右近の悩みを理解してくれたのが、イエズス会修道士ロレンソ了齋でした。右近は死に対する恐怖と人を殺すことへの嫌悪をロレンソに告白しています。青年武将となった右近は、人を殺す職業についていることへの悩みが癒えるどころかいつそう深くなり、武士という境遇を自分に課せられた十字架と考えるようになりました。しかし、和田惟長の事件を境にキリストの十字架に魅せられると、いのちを軽視してこの世の権力や名誉を求める生き方から、十字架のキリストに倣い、神への愛といのちに奉仕する生き方に救いを見出し、それに自分をかけていきます。

信仰の世界では、人を神から引き離してしまう苦しみは誘惑となり、神への信頼と人との絆を深める苦しみは試練となります。右近は3つの大きな出来事を試練として生き抜いていきます。第一の試練は荒木村重の事件（1578年）、第二の試練は秀吉のバテレン追放令（1587年）、そして、第三の試練が江戸幕府の禁教令（1614年）の時でした。優秀なキリシタン大名と目された右近は、織田信長や豊臣秀吉らの信頼を得て重用され、栄達を約束された道を歩むかに見えましたが、内的には信仰を土台に生きるキリストの兵士としての道を選び、神のためにいのちさえもささげる覚悟で歩み出していました。高槻から明石に改封された矢先、秀吉はバテレン追放令をもって、キリスト教に対する政策を大転換し、右近にも棄教を迫りました。右近はこれを固辞し、大名の身分を捨て、追放の身となりました。小豆島から肥後へと数年隠棲した後、加賀の国前田家に身を寄せ、結果的に26年間を能登（七尾）で過ごすことになりました。しかし、ついに徳川幕府の禁教令によって流罪となり、フィリピンに流されました。マニラでは、生きた殉教者のように大歓迎を受けましたが、高齢での過酷な船旅で身体は衰えて熱病に冒され、40日後の1615年2月3日未明、その63年の生涯を閉じました。

4. 生きながらの殉教

第一の試練となった荒木村重の事件のときから、右近はこの世で人に仕える生き方を捨て、いのちをかけても神に仕える生き方へと向かっていました。しかしこの時はまだ、自己奉獻の望みが神から与えられたものであることを知りませんでした。右近はいつでも殉教する覚悟をもち、また殉教を望んでもいたでしょう。しかし神は右近に、長い時間の中で殉教者になる道を用意したのでした。

第二の試練においては、右近はすべてを失ってでも救い主を堅固に信頼できる成熟した信仰を示し、殉教をも受け入れる霊的な力と慰めを体験しました。それでも、この時の右近の信仰は人間の能力と力に依拠したものでした。右近の深い宗教性と神への信頼には疑問の余地がないのですが、神は誤った自信から右近を解放し、徐々に神の愛を無私のところで受け止める人に変容させることを望まれました。追放の身となった右近は、殉教へのあこがれをあたためながらも、時の流れに逆らわず、自分に与えられた運命を受け入れ、神のみ旨を根気よく求めながら、神の導くまま、なお自分にできる宣教を続けました。これが右近に用意された生きながらの殉教を受け入れる道でした。

最後に右近は、殉教への積極的な望みが絶たれる第三の、そして最も辛く深い試練を受けることになります。金沢（加賀藩）を出立した右近は、処刑によって自分のいのちを英雄的に主に捧げる殉教を予測していました。にもかかわらず、長崎からマニラへの苦しい旅を強いられた最後の時間は、予想外のかたちで右近を決定的に真の殉教者に変えました。

5. 神のわざをあかしする苦難による殉教

殉教とは、人が自分の強さを示すことではありません。殉教という出来事は、神ご自身が弱い人間の中で働く神のわざなのです。恐ろしい拷問に耐えて死ぬことに殉教者の偉大さがあるのではなく、また現代のわたしたちがそれを顕彰するものでもありません。さらに殉教者は、犠牲者として暴力的な死の苦しみを負わされることに受け身でいるではありません。むしろ殉教者は、最期の瞬間まで神の意思に対する自由な応答を問われるのです。この応答だけが、その死を真の信仰のあかし、すなわち殉教となし得るのです。

国外追放前の9か月間、右近は処刑を覚悟し、澄み切ったところでその時を待っていました。ここで神は右近に最後の試練を与えます。流罪の地マニラは信仰を自由に生きられる土地です。右近は、神からいのちを捧げることを求め続けられるものの、それは即死のかたちではなく、ただゆっくりと死へ追いやる状態にさらされるという、継続する殉教であることを悟りました。それは、右近が自己に死ぬ旅となりました。マニラに到着したときは、もはや自分の運命が自身の手中にはなく、神の御手にあることを知りました。この自己否定の霊的な歩みのおかげで、右近はいつそう謙遜で、神の手からすべてを受けとる受容の人になりました。右近は息を引き取るまで、神への愛のために自分のいのちを捧げたいとの望みに忠実でした。右近は、キリストのあかし人（殉教者）になりたかったし、事実そうになりました。これが、右近において成し遂げられた神のわざでした。右近の死に立ち会ったイエズス会レデスマ師の年報は、次のように締めくくられています。「右近は、(わたしたちが知っているような) 血と死を通して信仰をあかしする殉教者ではありませんでした。しかし、彼が担ってきたたいへんな苦勞は信仰によるものでした。右近の人生は長い殉教生活でした。」

6. 右近にみるマルチルの聖性

キリスト教の歴史は、信仰をあかしする人々の歴史です。いつの時代にも迫害と殉教は起こるので、「すべての人は、キリストを人びとの前で証言し、教会にけっして欠けることのない迫害の中において十字架の道を辿るキリストに従う覚悟がなければならない」（教会憲章 42）のです。

右近から学ぶことは、わたしたちが神の手の中でその道具となるため、自分の力に頼る自我を捨て、あわれみに満ちた愛を注いでくださる神に自分をささげることです。信仰の世界は、自分が自分の力でこれだけのことを成し遂げたという世界ではありません。神が働いてくださる、そこに自分をゆだねていく世界です。神の愛によって自己が変えられていくことに身を任せ、自分の霊的な熱意を他者への愛に向けていく、これが右近の聖性への道であり、すべてのキリスト者の召命にあてはまることです。聖性とは、自己完成を自分の手でなし遂げることではなく、ご自分に引き寄せ、ご自分に似たものにしてくださる主からの賜物なのです。これについて、パウロはこう言います。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです」(ローマ8・29～30)。まさに右近は、その霊名のとおり、神によってキリストに似たものとして、義(ユスト)とされたのでした。

現代は相対的価値観に支配され、信念を貫いて生きることが困難な時代です。そして、さまざまな生き方の選択肢を用意しながらも弱肉強食の競争社会であり、生きるために自己責任が問われ、才能や能力の有無という価値観で負け組・勝ち組を振り分けようとする時代です。そのような時代に生きるわたしたちは、右近を聖性への道しるべにして、どのような状況に置かれても、神への愛と他者のいのちを大切にす聖性への道を選び、ぶれることなく福音に従う生き方を歩み続けたいと思います。

右近は、日本の教会への神からの愛と恵みです。神は、日本の教会に右近を福音の道具として送り、右近を通して働かれ、現代のわたしたちがその恵みに与るよう、今も働き続けておられるのです。「丸血留」(マルチル)の心で現代の殉教を生きる決意を新たにして右近の列福式をむかえ、来るべき列聖の恵みを祈り求めてまいりましょう。

2017年1月1日

神の母聖マリア